

## 審査の結果の要旨

氏名 加藤誠之

本論文は、不登校の現象を、フランスの哲学者サルトル、J. P.の『存在と無』における現象学的哲学をてがかりとしつつ解明しようとする研究である。不登校には貧困など社会的な要因を主としたいわゆる脱落型のものと、当事者の意識や心理によるもの（神経症型などと呼ばれることもある）とがあることが従来から指摘されているが、本論文は後者の不登校現象に着目する。

第1章では、不登校に関する各種の先行研究を時系列に沿って概観する。それをうけて第2章では、当事者によって生きられる生のありようを、ハイデッガー、M.の思索を手がかりとして理解しようと試みた生越達の見解を概観する。特に、不登校児童・生徒がなぜ不安に陥るのかという問題を必ずしも主題的に論じていない点が批判される。それを受けて第3章から第5章まででは、この問題を『存在と無』に見るサルトルの思索を手がかりとして検討がなされ、不安を端緒として引き起こされる不登校児童・生徒の諸経験を明らかにすると共に、教育者は彼らに対していかに対応すべきかが考察される。以上の理論的な考察をふまえて、第6章以下では、筆者が1990年代に見学した「適応指導教室」の実践、筆者が2000年代に法務教官として勤務した少年院での実践、筆者が2009年に現任校に赴任した後に見学した私立高校の実践等を事例として、具体的な検討がなされる。

第6章と第7章では、不登校児童・生徒が他者の前で自分の自由を封印し、周囲の要求に従順に振る舞う「よい子」の在り方を選択する点に注目がなされる。特に、不登校児童・生徒は学校に通うことを実現していないゆえ、「自分は他者によって非難されている」という罪責感を強く覚えている。彼らはこの罪責感から逃れるため、いっそう「よい子」の在り方に固執する。不登校児童・生徒は、「よい子」の在り方を完璧に演じようとするほど、この在り方を踏み外す可能性も意識し、ますます強迫的に「よい子」の在り方を演じずにいられなくなって疲れ果ててしまう。

第8章から第10章まででは、彼らがこうした事態から逃れるため、時として「よい子」の在り方を乗り越えようとし、信頼できる他者の前で「よい子」の在り方とは正反対の逸脱的な「遊び」を行う点への注目がなされる。サルトルによれば、このことは十分な理由をもつ事態である。というのも、遊びは、人間の自由を顕示し現前させることを目指す特殊な型の企てであるからである。それゆえ、遊びは「よい子」の在り方を選択する際に封印した自分の自由を取り戻し、「よい子」の在り方を乗り越える上で必要な営みとして位置づけられる。たとえば非行は、自分の自由を顕示し現前させることを目的とする遊びに他ならない。それゆえ、不登校児童・生徒は、時として軽微な非行のあるヤンチャな生徒とのかかわりの中で遊びを遂行し、自分の自由を回復していく。

本論文は、現象学的なアプローチによって、不登校に関する個人病理論的な理解と社会病理論的な理解との対立を乗り越えるための手がかりを提供し、その点に学術的意義が認められる。以上により、本論文は、博士（教育学）の学位を授与するにふさわしいものと判断された。